

謡曲「葵上」詞章	現代語訳
<p>大臣「これは朱雀院に仕え奉る臣下なり さても左大臣の御息女。葵上の御物の氣、以ての外に御座候程に、貴僧高僧を請じ、大法秘法医療様々の御事にて御座候へども その驗なく候 ここに照日の巫と申して正しき梓の上手の候を召し、生霊死霊の界を、梓に掛けさせ申さばやと存じ候。 やがて梓に御かけ候へ</p> <p>ツレ「天清浄地清浄 内外清浄六根清浄。寄り人は今ぞ寄りくる長浜の芦毛の駒に手綱ゆりかけ</p> <p>シテ「三つの車に法の道 火宅の内をや出でぬらん。夕顔の宿の破車、やる方なきこそ悲しけれ。浮世は牛の小車の 〳、廻るや報なるらん 凡そ輪廻は車の輪の如く、六趣四生を出でやらず。人間の不定芭蕉泡沫の世の習。昨日の花は今日の夢と驚かぬこそ思なれ。身の憂きに人の怨の猶添ひて、忘れもやらぬ我が思、せめてや暫し慰むと、梓の弓に怨霊の、これまで現れ出でたるなり。</p> <p>やら恥かしや今とても忍び車の我が姿。 月をば眺め明かすとも 〳月には見えじ陽炎の、梓の弓の末はずに、立ち寄り憂きを語らん〳〵 梓の弓の音は何くぞ 〳</p> <p>ツレ「四阿の母屋の・妻戸に居たれども</p> <p>シテ「姿なければ訪ふ人もなし</p> <p>ツレ不思議やな誰とも見えぬ上臈の、破車に召されたるに、青女房と思しき人の牛もなき車の轅に取りつき、さめざめと泣き給ふ痛はしさよ。 若しかやうの人にててもや候ふらん</p> <p>大臣「大方は推量申して候。唯包まず名を、御名乗り候へ。</p> <p>シテ「それ娑婆電光の境には、恨むべき人もなく悲しむべき身もあらざに、いつさて浮かれ初めぬん。只今梓の弓の音に、引かれて現れ出でたるをば、如何なる者とか思し召す。これは六条の御息所の</p>	<p>大臣私は朱雀院に仕え奉る臣下です。 さて左大臣のご息女・葵上に取り憑いた物怪が大層執念深いものですから、貴い立派な僧にお願いして、様々な祈祷や医療を施したのですが、一向に快報の兆し也没有せん。照日の巫女という梓弓で霊を呼ぶのが上手な霊媒師を招き憑き物が生霊なのか、死霊なのか、梓弓で占わせようと思っています。早く梓弓におかけ下さい</p> <p>ツレ天清浄地清浄。内外清浄六根清浄 世のひとつとは仏の方便に導かれ、苦しみから逃れるといひます。</p> <p>シテ源氏の君が夕顔の家にお通いになられて心乱れ、心慰める術がないのは悲しいものです。憂き世の苦しみは牛車の車輪と同じ、因果応報、これも前世の報いだろうか。 およそ輪廻は車の輪のごとく、六道四生の苦界を離れることはない。人間の一生は、芭蕉の葉の水泡のように儂く、昨日の花も今日は夢のごとく散ってしまう。それに気付かぬとは何と愚かなことだろう。この身の辛さに、人の恨みまで加わって、忘れることもできないわが思い。せめて、ほんの暫くの心の慰めにと、梓弓の音色に惹かれ、ここに現れ出たのだ。ああ、なんと恥ずかしいことだろう。車争いの時と同じ忍び車の姿ではないか。どれほど月を眺めて夜を明かしても、月には見えない陽炎のようなものだから、せめて梓弓の側まで立ち寄って、胸の辛さを語ろう。梓弓の音がするのはどこか。</p> <p>ツレ東屋の母屋の戸口に立っているが</p> <p>シテ姿が見えないので、問う人もいない。</p> <p>ツレ不思議なこと、誰か分からぬ高貴な女性が、破れ車に乗っておられ、お付きと思われる人が、牛も付けていない車の轅に取り付いて、さめざめ泣いておられる痛わしよ。もしや物怪はこのような人ではありませんか。</p> <p>大臣およそ推量いたしました。 ただ包み隠さず御名前をなのって下さい。</p> <p>シテ夢のように儂いこの世では、恨むべき人もなく、悲しむべき身の上でもないはずなのに、どうしておめおめと出て来たのだろう。 唯今の梓弓の音色に引かれて、現</p>

怨霊なり。我世に在りし古は、雲上の花の宴。春の朝の御遊に馴れ、仙洞の紅葉の秋の夜は月に戯れ色香に染み、華やかなりし身なれども、衰へぬれば朝顔の日影待つ間の有様なり。唯いつとなき我が心。物憂き野辺の早蕨の萌え出でそめし思の露斯かる怨みを晴らさんとて これまで現れ出でたる

地歌「なり。思ひ知らずや世の中の、情は人のためならず、我人の為つられれば 〳〵必ず身にも報ふなり。何を歎くぞ葛の葉の、恨はさらに尽きすまじ。〳〵

シテ「あら怨めしや。今は打たでは叶ひ候ふまじ

ツレ「あら浅ましや六条の御息所程の御身にて、後妻打ちの御振舞。いかでさる事の候ふべき。唯思し召し止り給へ

シテ「いや如何に思ふとも、今は打たでは叶ふまじと。 枕に立ち寄りちやうど打てば

ツレ「この上はとて立ち寄りて、妾はあとにて苦を見する

シテ「今の恨は有りし報い

ツレ「嗔恚のほむらは

シテ「身を焦がす。

ツレ「思い知らずや。

シテ「思ひ知れ

地「怨めしの心や。あら怨めしの心や。人の怨の深くして憂き音に泣かせ給ふとも、生きて此世にましまさば、水暗き沢辺の螢の影よりも光る君とぞ契らん

シテ「わらわは蓬生の

地「もとあらざりし身となりて、葉末の露と消えもせば、それさへ殊に怨めしや夢にだに返らぬものを我が契。昔語になりぬれば、尚も思は真澄鏡。その面影影も恥かしや。枕に立てる破車、打乗せ隠れ行かうよう。〳〵

れ出でた私を、いかなる者とお思いでしょう。私は六条御息所の怨霊です。私が生きていた昔には、宮中の花の宴で、春の朝の催しに興じたり、紅葉に染まった秋の夜は、月を眺めたり色香を愛でたりと、華やかな身であったけれど、威勢が衰えてしまった今、朝顔のように、日陰を待つような儂い身になってしまいました。唯、いつの間にか自分の心に、野辺の早蕨の萌え出でる露のように、この恨みを晴らそうとここに現れ出でたのです。

地歌お分かりでしょうか。世の中の、情けは人の為ならず。私が辛い思いをしているからには、その人にも、必ず報いがくるでしょう。その人がどんなに嘆き悲しむことがあっても、私の恨みは、決して消えないのです。

シテああ 怨めしや。今はこの葵上を打たずに済ませぬ

ツレああ、何と浅ましい。六条御息所ともあろう御方が、うわなり打ちとは何たるお振舞い、そんなことをしてはいけません。ただ、自重してください。

シテいや、なんと思おうとも、今は打たずにおられませぬ。 葵上の枕元に立ち寄って、えいと打てば

ツレこの期に及んで、六条御息所の側に立ち寄って、後で私が罪を与えます。

シテ今のこの恨みは、過去に受けた苦しみ。

ツレなのに恨みの炎は

シテ我が身を焦がす。

ツレまだ分からないのですか。

シテ思い知りなさい。

地怨めしい心よ。ああ、何と怨めしい心よ。私のこの深い怨みで、たとえ葵の上を泣かせたとしても、生きてこの世にいらっしやる限り、水暗き沢辺の螢の影よりも光る君との契りるでしょう。

シテそれにひきかえ)この私は蓬生のように

地他人同様の関係となり、葉末の露のように儂く死ぬかと思うと、より一層、恨みは増します。夢でさえ私は契ることのない昔の物語になってしまいました。なおさら想いは募るのです。その自分の姿が恥ずかしい。せめて乱れ車に葵上を乗せ、死後の世界に連れ去ってしまおう

大臣「いかに誰かある。汝は横川に上り、小聖へ参り、御加持の爲にてある、急ぎ御参りあれと申し候

狂言シカシカ

ワキ「九識の窓の前、十乗の床のほとりに、瑜伽の法水を湛え、三密の月を澄ます所に、案内申さんといふは如何なる者ぞ。

狂言シカシカ

ワキ「別行の子細候へども大臣よりと承り候間、参じて候」

大臣「夜陰と申し、御参めでとう候

ワキ「さて病者はいづくに御座候ふぞ

大臣「あれなる大床に御座候。そとご覧候へ。

ワキ「これは以っての外の邪氣と見えて候程に。やがて加持、申そうずるにて候。

大臣「急ぎ御加持候へ

ワキ「行者は加持に参らんと、役の行者の跡を継ぎ、胎金両部の峯を分け七宝の露を払ひし篠懸に、不浄を隔つる忍辱の袈裟。赤木の珠数のいらたかをささり／＼と押しもんで、一祈こそ祈つたれ。東方に降三世明王。曩謨三曼荼囉日羅赦

シテ「如何に行者。早帰り給へ。帰らで不覚し給ふなよ

ワキ「たとひ如何なる悪霊なりとも、行者の法力尽くべきかと、重ねて数珠を押しもんで

地「東方に降三世明王。／＼

シテ「南方軍荼利夜叉 **地**「西方大威徳明王

シテ「北方金剛 **地**「夜叉明王

シテ「中央大聖 **地**「不動明王。曩謨三曼荼囉日羅赦旋陀摩訶嚕那。娑婆多耶吽多羅托干曼。聴我説者得大智慧。知我心者即身成仏。

シテ「あら／＼恐ろしい般若声や

地「これまでぞ怨霊。この後復も来るまじ。読誦の声を聞く時は、悪鬼心を和らげ 忍辱慈悲の姿にて、菩薩もここに来現す。成仏得脱の身となり行くぞ有難き／＼。

大臣誰かおるか。横川の小聖のところへ参り、加持祈禱においで下さいと申し伝えなさい

狂言しかじか……

ワキ九識の窓に思いを静め、十乗の観法を行い、身も心も崇高な状態に保っている私に案内を頼むのは誰だ

狂言しかじか……

ワキ特別の法事があって忙しく、どこにも出かけずにおりますが、大臣よりの御使者であれば、参ろう。

大臣 この今、ご足労頂き有り難うございます。

ワキさてご病人はどちらにおられるのか。

大臣 あちらの大広間におります。

ワキこれは大層重篤に見えますので、すぐに加持祈禱を始めましょう。

大臣急いで加持祈禱をお願いいたします。

ワキ行者は加持祈禱に入るため、役の行者の跡を追って、吉野の大峰を分け、七宝の露しのぎに着ていた篠懸と汚れを祓う袈裟を身にまとい、赤木の刺高の数珠をささりさりと押しもんで、一祈り、祈ったのだった。東方に降三世明王。曩謨三曼荼囉日羅赦

シテこれ行者早く立ち去りなさい。帰らないと後悔なさいますよ。

ワキたとえどんな悪霊であろうとも、この行者の法力が負けるものかと、重ねて、数珠を押しもんで、

地東方に降三世明王

シテ南方には軍荼利夜叉 **地**西方には大威徳明王

シテ北方には金剛 **地**夜叉明王

シテ中央大聖 **地**不動明王。なまくさまんだばさらだ。せんだまかろしやな。そわたやうんたらたかんまん。我が説を聴く者は大知恵を得ん。我が心を知る者は即身成仏とならん

シテああ、何と恐ろしい般若の声

地これまでだ怨霊。この後、二度と現れるでない。読誦の声を聞くときは、悪鬼は心を和らげ、忍辱慈悲の姿になり、まるで菩薩がここに現れたようだ。苦悶を逃れ、成仏の身になりゆく事こそ、誠にありがたい……。